



第2戦は荒天により途中打ち切り

シリーズ名：2016年全日本スーパーフォーミュラ選手権 シリーズ第2戦
大会名：2016年全日本スーパーフォーミュラ選手権 第2戦 岡山国際サーキット
距離：3.703km×68周 (251.804km)
予選：5月28日(土) 曇・観衆：4,500人(主催者発表)
決勝：5月29日(日) 曇/雨・観衆：7,000人(主催者発表)

全日本スーパーフォーミュラ選手権 シリーズ第2戦が、5月28日(土)～29日(日)、岡山県の岡山国際サーキットで開催された。DRAGO CORSEは、小暮卓史を起用して本レースに参戦した。しかし金曜は真夏、土曜日は曇り、日曜日は雨と天候が変転し、結局決勝レースは悪コンディションを理由にセーフティカー先導のまま赤旗で中断、8周で打ち切られた。

●5月27日(金)

■専有走行：1分16秒450 7番手

今年度より金曜日にも専有走行セッションが設けられ、小暮は27日午後3時35分から1時間の走行を行った。天候は快晴で気温31℃、路面温度46℃に達し、真夏のコンディションとなった。小暮は持ち込みセッティングを確認しながら23周を走行、トップタイムから0秒692差の1分16秒450を記録、出走19台中7番手につけてセッションを終えた。

●5月28日(土)

■フリー走行 1回目：1分13秒840 3番手

明けて28日土曜日、岡山国際サーキットには雲がかかり、前日とは一転して気温が低下した。午前9時00分から1時間にわたり、ドライ路面でフリー走行が行われた。

小暮は順調にタイムを縮め、前日の専有走行よりもハイペースで周回を重ねた。セッション前半、小暮は15秒台前半でセッティングを確かめる。ちょうどセッションを折り返す頃にコースオフした車両を回収するため赤旗が提示されセッションは一旦中断となった。小暮はピットに帰還し、後半に公式予選で行うタイムアタックのシミュレーションの準備に入った。

セッション再開後、コースに入った小暮はセッション終了直前に1分13秒840を記録、トップタイムと0秒218差の3番手につけて手応えを確認して走行を終えた。

■公式予選：1分15秒681 19位

真夏のような太陽が照りつけた前日とは異なり、気温22度というコンディションで公式予選が始まった。従来通り、Q1は20分間のセッションで、上位14台がQ2へ進出するとともに15番手以降のスターティンググリッドが決まり、Q1上位14台が7分間のQ2セッションに進出してタイムアタックを行った結果、上位8台がQ3に進出して9番手以降14番手のスターティンググリッドを決定、Q3でポールポジションを含む上位8つのグリッドを争うという、通常の規則が適用される。

午後2時10分に20分間のQ1セッションが始まった際、小暮はまずユーズドタイヤを装着してコースイン、セッティングの確認に入った。セッティングを確かめながらタイヤをウォームアップ、4周目には1分16秒645を記録し5周を走ってピットへ帰還した。ピットへ帰還した時点で小暮の順位は14番手だった。

セッション後半に向けて小暮はニュータイヤを装着、タイムアタックに備えた。セッション残り7分を切ったところでコースイン、タイヤをウォームアップしてタイムアタックに

入る。しかし思いの外タイムが上がらず小暮は1分15秒489の16番手でチェッカーを受けた。さらにその後、このタイムはイエローフラッグ提示時に記録したものと記録から抹消され、小暮の正式タイムは1分15秒681となり、19番手でQ2進出はならなかった。

●5月29日(日)

■フリー走行 2回目:1分17秒143 9番手

天気予報通り、岡山国際サーキットでは天候が悪化し曇り空で湿気が漂うコンディションとなった。決勝レースがスタートする頃には雨が降り出すという予報が為される中、小暮はドライタイヤを装着して決勝レース向けのセッティングを確かめるため30分間のフリー走行に臨んだ。

コースイン後10分を経過した時点で小暮のタイムは1分17秒777で5番手。ここでコースオフした車両を回収するため赤旗が提示されセッションが中断された後、残り13分で再びコースオープンとなり、小暮は1分17秒143までタイムを縮めて走行を終えた。最終的には出走19台中9番手のタイムであった。

■決勝レース:15位 (22分26秒512 8周 ベストラップ 2分27秒543)

フリー走行後、雨が本格的に降り始め、午後3時の決勝レーススタート時刻が近づいてくると雨が強まってスタート時にはフルウェットコンディションとなった。

決勝レーススタートはセーフティカー先導でのスタートとなった。小暮は最後尾についてスタートした。競技車両のタイヤウォームアップが完了した時点でセーフティカーが退き、レースが「再開」される予定だったが、路面状況は悪化するばかりでコース各所には深い水たまりが出来始め、レースを再開できないままセーフティカーランは8周に渡って続いた。

レースは続行している扱いだったので再開後の戦略を考慮してピットイン義務を消化するチームも出る中、小暮も5周目にピットイン。給油だけを済ませ、走行を続行。少しずつ順位は繰り上がったがセーフティカーラン中は追い越し禁止なので自分で順位を上げることはできない。

結局競技団はレース再開の目途が立たないとしてレースをそのまま赤旗で中断し、競技車両を9周目のホームストレート上に停止させ天候回復を待つこととなった。しかし天候は回復せず、午後4時5分、レース再開を断念して以降のレースを打ち切った。レース結果は競技規則により赤旗提示前に完結した8周目の順位で決定することとなり、小暮は15位で完走しレースを終えることとなった。

なお走行距離がレース距離の75%未満だったことを受け、競技規則により入賞ドライバーには、選手権ポイントの半分が与えられることとなった。15位の小暮は得点を重ねることはできなかったが、第2戦終了時点でドライバー部門6番手、チーム部門5番手に付けている。シリーズ第3戦は、7月16日～17日、富士スピードウェイで開催される。

■小暮卓史選手コメント

この週末は、うまくいったりうまくいかなかったり奇妙な感じでした。鈴鹿よりも自信があったので、悔しいです。予選前のフリー走行前では3番手だったので、これでいけるかなと思ったんですけど、いざ予選になったら不思議な状況になってしまいました。ユーズドタイヤで走ってフィーリングを確かめて、ニュータイヤに交換してアタックに入ったら全然グリップしなくてタイムがほとんど縮まらなかったんです。原因がどこにあるのかわかりませんが、クルマではないのは確かです。むしろある部分ではユーズドよりもグリップしませんでした。結果として黄旗でのペナルティをとられてしまいましたし、こういう

噛み合わないときってあるものですね。決勝レースは、個人的にはレースをやりたい気持ちもあるにはあったんですが、現実問題として全然前が見えなくてレースにはならなかったでしょう。ファンにも申し訳なく思っています。ただ、今回の岡山では結果こそ残らなかったのですが、チームとしてはかなり良い経験を積んだように感じます。これを次回につなげられればと思います。ハーフポイントだったのでポイント差が開かなかったのも不幸中の幸いでした。

■道上龍監督コメント

金曜日の気温と土曜日の気温があまりにも違いすぎたので、チームとして小暮が好むセットになかなか持って行けませんでしたが、土曜日朝のフリー走行では13秒台で走っていたので、予選もこのままで行けるな、と思っていたんですが、なぜかラップタイムが2秒近くも落ちてしまった。確かに全体的にみんなラップタイムは落ちていたんだけど、何か起きたんでしょうがその原因がわかりません。小暮は「タイヤが暖まっていないような状態だ」と言うんですが、温度も内圧もそこそこまで上がっているんです。予選結果を見ると、同じような現象が起きているチームもあるようなので、原因を究明したいと思います。決勝については、予選順位が予選順位だったので、仕切り直すためにはある意味ハーフポイントに終わったことには救われたように思います。富士までは時間があるのでしっかりクルマのメンテナンスをして臨みます。

